

## モデルプログラム H-5 子どもの日本語教育の理論と方法

### ーリライト教材の作成と活用ー

ねらい	リライト教材について学び、日本語力がまだ十分ではない児童生徒も教材の工夫によって、学年の教科学習内容が分かり、充足感を与えられることを理解する。
対象	<input type="checkbox"/> 教師を目指す学生（教員養成課程他） <input type="checkbox"/> 日本語教育を学ぶ学生 <input checked="" type="checkbox"/> 現職日本語指導担当教員 <input checked="" type="checkbox"/> 現職一般教員 <input type="checkbox"/> 管理職 <input type="checkbox"/> 指導主事 <input type="checkbox"/> 日本語支援員／母語支援員
外国人児童生徒教育・日本語指導の経験	<input checked="" type="checkbox"/> 経験なし <input checked="" type="checkbox"/> 1年目 <input type="checkbox"/> 2-4年 <input type="checkbox"/> 5-9年 <input type="checkbox"/> 10年以上
高めたい資質・能力	<input checked="" type="checkbox"/> 捉える力（子どもの実態把握） <input type="checkbox"/> 捉える力（社会的背景の理解） <input checked="" type="checkbox"/> 育む力（日本語・教科の力の育成） <input type="checkbox"/> 育む力（異文化間能力の涵養） <input type="checkbox"/> つなぐ力（学校作り） <input type="checkbox"/> つなぐ力（地域作り） <input type="checkbox"/> 変える／変わる力（多文化共生社会の実現） <input type="checkbox"/> 変える／変わる力（教師としての成長）
内容項目	H 子どもの日本語教育の理論と方法    J 在籍学級での学習支援
活動形態	<input type="checkbox"/> 講義型 <input checked="" type="checkbox"/> 活動型 <input type="checkbox"/> フィールド型 <input type="checkbox"/> 実習
時間	90 分
流れ（・項目）	活動
1. 教科学習への参加支援の重要性を確認する。(10分) ・ことばと思考(F) ・社会参加とことばの力(K)	1. 外国人児童生徒等の教育において、日本語の指導のみでは不十分で、教科学習の支援が必要であることを確認する。 1) 子どもの言語の習得の特徴について次の点を確認する。 ・日本語の文字・表記や、語彙・文法などの形式面のみの指導では、考える力の育成ができない。 ・年齢に応じた学力や認知力を発達させるためには、学習言語能力の獲得を待っていることはできない。 ・学力や認知力の発達は、進学、さらには将来保障に大きく関係してくる。
2. 学年による教科のことばの違いを知る。(15分) ・教科のことば(H)	2. 教科書のことばが、学年によって変わることによる、子どもたちの困難を理解する。 <算数の教科書の例> ・半分にわけると2年生 ⇒ 等分すると3年生 ・2つに分けた1つ分(2年生) ⇒ 2等分した1つ分(3年生)
3. リライト教材が何かを知り、有効性を理解する。(10分) ・学習参加のための支援(J) ・日本語学習と他教科の内容・活動との関連づけ(カリキュラム・マネジメント)(J)	3. 教科学習内容の理解を助けるリライト教材が具体的にどのようなものなのかを教材例を見ながら知り、その有効性について理解する。 <リライト教材とは> ・教科書教材を子どもの日本語レベルに配慮して、やさしい表現に書き換えるが、内容は学年相当レベルを維持する。 ・教科書教材の味わい、面白さ欠くことのないようにする。 ・在籍学級の学習目標に即し、取り出しクラスでの学習と在籍学級での学習とを関連付け、目標を達成できるように段階的な学習課題を用意する。
4. リライト教材を作成し、発表する。(50分) ・教材の作成(リライト教材等)(H)	4. グループでリライト教材を作成する。 1) 対象児童の日本語の力を「DLA」ステージ3(読む)として、次の点を意識してリライト教材を作成する。 ・語彙の選択 ・文法構造の単純化 ・教科のねらいが達成できるようにする ◇リライトする教科書を用意しておく(3種類程度)。

<p>5. リライト教材利用に関する留意点を確認する。(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・周囲の児童生徒との相互学習(J)</li> <li>・内容(教科等)と日本語の統合学習「JSLカリキュラム」(H)</li> </ul>	<p>2) 作成したリライト教材を紹介し合う。</p> <p>5. リライト教材の作成・利用について、次の点を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の日本語レベルにあったリライト教材を作成すること 児童生徒が理解できるレベルにすることで、教科内容を理解することができる。</li> <li>・教科内容が分かるという充足感を味わえるようにすること 日本語をやさしくすることで、在籍学級の仲間と同じ内容の学習ができるようにする。⇒日本語の学習にも積極的に取り組むようになる。</li> <li>・リライト教材での学習を一般の教科書での学習に活かすこと 取り出し指導と在籍学級の授業を関連づけることで、在籍学級での教科書での学習にも参加できるようになる。</li> </ul>
<p>備考</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント (DLA) 』(文部科学省・平成 25 年度)には、日本語の発達状況の技能別・観点別「JSL 評価参照枠」が掲載されている。</li> </ul> <p>評価参照枠 : <a href="http://data.casta-net.jp/kyouzai/shidou/mokuhyou-rei-syoki.pdf">http://data.casta-net.jp/kyouzai/shidou/mokuhyou-rei-syoki.pdf</a></p>